

社会的観相学から「交換」の圏域へ*

—— 戦間期のアドルノとマルクスの影 ——

表 弘一郎

はじめに

2019年、Th. W. アドルノ（1903–69）が突然の心臓発作で没してから50年が経つ。アドルノと言え、今では大文字の「批判理論」と揶揄される戦後西ドイツの（知的）再建に寄与した哲学者・社会学者・音楽家だが、その時代診断や文明診断の妥当性や現代性は措くとしても、少なくとも思想史の検討対象ではあるだろう。そのようにみなした場合に浮上する問いがいくつかあるが、その中でも「アドルノとマルクス」ないし「アドルノのマルクス受容」というテーマは、マルクスが再び新たな光を当てられている今日、検討に値するものと考えられる。

とはいえ、本論文は、アドルノ思想の全てにおいてマルクスの影響を検証し、アドルノがマルクスの諸概念をどのように理解（ないし誤解）し、どのように批判したかを析出するわけではない。対象とする時期は主に1920年代から30年代初頭にかけてである。時期限定の理由は、アドルノがフランクフルト大学（現ゲーテ大学フランクフルト）に入学したのが1921年であり、2度目の教授資格論文によって同大学に私講師として就任した後、就任講演「哲学のアクチュアリティ」（1931）、カント協会での講演「自然史の理念」（1932）という2つの講演を行なった1930年代初頭までの期間に「交換」の淵源を探るためである。しばしば指摘されるように、30年代初頭のアドルノの思索に、否定弁証法や「非同一的なもの」など後年のアドルノ思想の萌芽を読み込むことは困難ではない（細見（1990）など）。したがって、この約10年間でアドルノがマルクスの影響を受けつつ独自の意味を与えた諸概念や表現がどのように現れ始めるのか、これをテキストとコンテクストから分析するのが本論文の目的である。

そうした概念や表現は少なくない。例えば交換（社会）、物象化、資本主義、自然史などである。とりわけ「交換」はアドルノの社会理論の中心的な位置を占める。というのも、アドルノの

* 本誌の匿名のレフェリーの方々に感謝します。また、本論文投稿後にマルクス研究会第24回定例研究会（2019年12月15日 於一橋大学）にて報告を行なった際、フロアの皆さまから賜った極めて本質的なコメントにも感謝します。

社会学ゼミに参加していた Backhaus (2011) の証言によれば、『否定弁証法』(1966) の彫琢と並行して自らの社会理論の非-体系的展開⁽¹⁾を進めていた 1962 年の時点でアドルノは「交換は依然として社会にとっての鍵である」と発言しているからである (Backhaus (2011) 507)⁽²⁾。したがって、「交換」およびそれに付帯して「物象化」の初出がどの時点に見られるのか、という問いは問われて然るべきものだろう。

簡単に先行研究に触れておこう。麻生 (2010) は最も早くマルクスとアドルノとの関係に切り込んだ論考であり、「自然史の理念」の意義を取り出すことに成功している。また、岩熊 (2016) も同様に自然史の理念に照準しながらも、環境哲学などの観点から最新の研究を参照しつつ独自の解釈を施している。とはいえ、両者ともアドルノの社会理論を最もよく特徴づけると考えられる「交換」に照準しているわけではない。したがって、「交換」の初出を丹念に跡付けることでアドルノの社会理論を分析する一助とする意味はあると考えられる。以下、第 1 節では 1920 年代、第 2 節では 1930 年代初頭の主要テキストを時系列で分析し、第 3 節では戦間期のアドルノ思想とマルクス思想との関係を「交換」を軸に整理し、それらの分岐の地点を明らかにする。

1. 1920 年代における「社会的観相学」

16 歳のアドルノ⁽³⁾ が哲学的思索を始めたのは G. クラカウアーとともに進めた『純粹理性批判』の解読からだった。後年、クラカウアーから哲学的テキストを「力の場」として読む手ほどきを受けた旨の述懐を行なっているが (GS11 S. 388-389, 邦訳 82 頁)、その解読のあり方にマルクスの影響を検証するのは困難と考えられる⁽⁴⁾。むしろ同時期、すなわち大戦の終結後ドイツ革命が挫折した 1919 年の時点で感じ取られた歴史的偶然性の感覚こそ、アドルノ思想の特徴という点では重視されるべきものと考えられる。この偶然性の感覚については、後の講義「歴史と自由の教説について」(1964/65) で回顧されているが (Adorno (2001) S. 250)、16 歳のアドルノが当時その感覚を書き留めた文章が遺されているわけではない。

1-1. フランクフルト大学における社会学プロジェクトと社会研究所との交差

さて、1921 年にフランクフルト大学に入学したアドルノは、1919 年にフランクフルト大学経済・社会科学部にはじめて設置された社会学・理論経済学講座に着任した F. オッペンハイマーのゼミを受講し、同じく 1921 年に経済・社会科学部に私講師として着任したばかりの G. ザロモンのゼミも受講した。M. ホルクハイマーとは 1922 年に A. ゲルブ (ゲシュタルト心理学) のゼミで知りあっている。1914 年に創設されたフランクフルト大学は市民の寄付に寄るところが大きい「市民の大学」だったが、アドルノが入学した同大学は、まさにヴァイマル共和政のもとで学際的な仕事を始めようとした学者たちが集う場になりつつあった。実際、1909 年のドイ

ツ社会学会の設立など「社会学」の一連の制度化のなかで、ザロモンは、各国の社会学者たちを巻き込む社会学プロジェクトを開始し、『社会学年誌』発刊、フランクフルト社会学会設立と矢継ぎ早にその構想を実現していった⁽⁵⁾。

一方、アドルノは、1923年に知り合ったW. ベンヤミン（ベルリン時代に知り合ったザロモンが彼のためにフランクフルトで教授資格を取得できるよう尽力した）やE. ブロッホらと別の交友関係をも築いていた。のちにホルクハイマーが所長を務めることになる社会研究所および『社会研究雑誌』に具現化しつつも、完全には重複するわけではない相互作用の場、恐らくはアドルノにとって知的交流と思想の発酵に不可欠の場である。同時期に音楽批評なども投稿している。

1924年に学位論文「フッサール現象学における物的ノエマ的なものの超越」によって同大の学位を取得したアドルノは音楽家としての活動の場をウィーンに見出そうとするが、この試みは失敗に終わり、哲学的活動を再開する。1927年には「超越論的心理学における無意識的なものの概念」によって教授資格を申請しようとするが、H. コルネリウスの示唆によってこれを撤回する。

アドルノは1928年からウィーン発刊の音楽誌『アンブルッフ（Anbruch）』の編集に関与し、多数の批評を寄稿するようになる。

1-2. 『アンブルッフ』

アドルノが『アンブルッフ』へ寄稿した批評には、「イデオロギー」や「弁証法」などの語彙が頻出する。以下、発表年順に追っていこう。

「レコード針の溝」（1927）は、1965年の改定稿で加筆と削除が行なわれている点にアドルノの思考の変化が見て取れる。下記の文章では下線部2箇所が加筆されている。

「…そこには支配社会の抱くイデオロギー的需要があまねく貫いている。支配社会は要求しているのだ。主観の側が〔複製された対象物たる〕客体と——例えば複製された声そのものと——和解を遂げることを。」（GS19 S. 525-526, 邦訳 269頁）

加筆箇所を外して読めば、ここでアドルノが「和解」という論点を重視していたことが理解できる。ところが、1965年版では「イデオロギー」へと力点が移動し、主観と客観との和解が支配社会によって現状を糊塗すべく要請されたものだというイデオロギー論が強調されていることがわかる。

グラモフォンをめぐる述べられた下記の文章では、『アンブルッフ』版では1番目の下線部は「弁証法的なかたちで押し入ってくる」となっており、2番目の下線部は「かの弁証法の聴き

手も対象も」となっている。

「かくてグラモフォンのこの頑なに守られた領域に、ラジオ技術の作法が押し入ってくる。そうしてそれはこの領域を、内部から破砕してしまう。聴き手も〔その音楽が当てにしている〕対象も、小市民階級の娘たち、それもたいてい未成年の娘たちである。」(GS19 S. 528, 邦訳 273-274 頁)

このように読めば、この箇所では「弁証法」に厳密な規定を与えないまま使用していたと理解できる。A. シューンベルクが嫌ったと言われているように、音楽の内容と乖離するかに見える思弁的な叙述がやや過剰に見られる⁽⁶⁾。レコードは最終的にイデオロギーと断じられる。「レコード盤とは常に、それを所有する者を映す仮想写真である。それも実際よりきれいに撮れた写真——つまりはイデオロギーである」(GS19 S. 528, 邦訳 274 頁)。

アドルノが意図する「弁証法」は、むしろ「シューベルト」(1928) (『楽興の時』(1964) 再録) の次のような文章に見られるものだろう。

「シューベルトの弁証法は正にこのようなものである。つまり、主観的な内面性の力 (Macht) によって、存在する客観性の薄れかかった形象を吸い寄せ、音楽上の具現の微少な細胞のうちにこれを移し入れようとする類のものだ。」(GS17 S. 24, 邦訳 32 頁)

ここで用いられている「内面性」は、数年後に取り組みれることになるキルケゴール論に近いものかもしれない。論点の先取りになるが、私人キルケゴールの思想をアドルノはこのように捉えている。

「キルケゴールの思想のあい矛盾する契機、意味、主観、客観は、決してばらばらに乖離してしまうのではない。これらは終始、たがいに絡み合っている。そのおりなす形姿が、すなわち内面性である。」(GS2 S. 45, 邦訳 54 頁)

キルケゴール論の場合は、圧倒的な資本主義の外界から後退する私人の内面性に全てが凝縮されているのだが、シューベルト論の場合は、客観性の形象を音楽の微細な表現に移し入れるのは主観的な内面性の力なのであり、この点で内面性の把握が異なっている。やや強く解釈すれば、物象化に抗する戦略の異なり、ないし物象化の現状に対する評価の違いと言えるだろうか。シューベルト論の段階では(主観的な)内面性は物象化に抗しうるものとして描かれていたが、キルケゴール論では内面性への後退が物象化の現状の表現となる。

「Motive III」(1928年8-9月)⁽⁷⁾には、芸術の変容と現実の変容との関係という論点が現れる。

「芸術の根本的な変容を意識の変化としてのみ理解するのは、あまりにもナイーブだろう。芸術の変容にはつねに現実世界の変化が関わっている — それが事実としての変化であれ、美的に先取りされた変化であれ。〔空間の次元という〕この次元の喪失は、自然の深みという自らの第三の次元を喪失しはじめている事物世界の崩壊それ自体を、指し示しているのではないか？」(GS18 S. 17, 邦訳 109 頁)

絵画における空間の次元および音楽における調和の次元の後退は意識の変化を表現しているのではなく、むしろ現実世界の変化を先取りする — こうした認識はアドルノの芸術論に類出するが、事物世界の崩壊という大仰な表現の陰に潜む「自然の深み」の喪失という批判的論点を注視すべきだろう。最初期に書かれた論文「自然」(1921)や、やがて「自然史の理念」や『啓蒙の弁証法』で主要な論点となる「自然」がここにも姿を表している。

アドルノは1929年1月号から『アンブルッフ』の編集に関与し、雑誌名もMusikblätter des AnbruchからAnbruchに短縮された(Redaktion (1929) S. 1-3)。同号所収の「夜の音楽」を見てみよう。後年、アドルノは同批評を『楽興の時』に再録する際、次のように回顧している。

「『夜の音楽』は『アンブルッフ』の精神的傾向をしめすプログラムとして構想された。音楽の歴史的な動態、作品のそれ自体における変化、音楽における再生産の理論などをめぐって後年著者の試みた労苦にみちた探究は、ここから出発している。」(GS17 S. 10, 邦訳 9 頁)

このように、いわば綱領的なプログラムとしてアドルノが同批評を執筆したとすれば、彼が新しい編集方針として掲げた「音楽に内在的な側面」と「理論的で社会学的な側面」(GS19 S. 595)の二本柱がそこに垣間見られても不思議ではない⁽⁸⁾。ところで、同批評末尾には『楽興の時』再録時に削除された3段落が存在する。削除理由についてアドルノの言及はなく、管見の限りこの点を分析した文献は存在しない⁽⁹⁾。最終段落の下記の箇所を注視されたい。

「社会的現実、芸術によってまるごと変えることはできない。しかし、芸術の変化は、今もなお惰性で社会から求められているものによって芸術が歪められないかぎり、社会の変化の前触れとなる。むしろ音楽は、社会の表面的な仕組みの深奥で衝撃をともないつつ生じているだろう事柄を、その微かなタッチのなかですでに写し取り、それを早くも表面(Overfläche)へと押し進め、表面において理解されている状態とは異なるかたちにもたらず。したがって、音楽にまったく希望がないことはないのである。」(Wiesengrund-Adorno

(1929) S. 23)

この結語は芸術（音楽）の優位、ないし希望を語っている。音楽は、社会の変化を鋭敏に感じ取り、社会の変化を先取るだけでなく、社会システムの内奥で生じている事態を表面（＝イデオロギー）とは異なるものに変化させる。音楽に対するこのような積極的な評価は、20年代末に論じられた音楽のイデオロギー機能や1930年代初頭の哲学論と容易には整合しない。特にここで音楽に与えられている働きは、「哲学のアクチュアリティ」で展開されることになる、解釈としての哲学が行なう「布置」に近いものである。この箇所は、アドルノが社会の変化の叙述法を探しあぐねた模索の過程と読むことができよう。「布置」に近い音楽の役割は、後に哲学に取って代わられたために、この箇所は削除されたのではないかと推測される。

さらに、『アンブルッフ』に寄稿された批評の中でも「流行歌分析」（1929年3月）には徐々に音楽の社会的分析へと移行する筆致に注目すべきものがある。例えば、「奥さまお手をどうぞ」（1928年の歌）では「階級意識」という表現が用いられている。

「…この流行歌の弁証法は、〈ヴィーデン〉ではまだ壊れずに残っていたが〈ヴァレンシア〉において決定的にアナキーな嵐によって震撼させられるに至った、そのような階級意識の深部へと通じているのだ。」（GS18 S. 786, 邦訳 131 頁）

同批評の結論では「社会の秩序」という次のような表現が見られる。

「…そうした〔虚構の〕自我は、社会の秩序が現実にはどのようなものであるかをイデオロギー的に隠蔽するために必要とされるのである。現実の社会の秩序のなかでは誰も『奥さまの手にキスを』する時間などとくに持っていないのであるが。だがこのような秩序のなかでは、誰もが、思わずその歌を歌ってしまうほどに、流行歌の作り手に根っから依存しているのである。」（GS18 S. 787, 邦訳 133 頁）

流行歌「ヴァレンシア」では、その旋律とは相反するように「決定的にアナキーな嵐」が吹き荒れていた。「奥さまお手をどうぞ」の分析中に見られる次の表現に注目しよう。

「混沌の上にゆるく被さった覆いが好ましいと思えるのは、それがその人にとって有利にはたらくときだけである。」（GS18 S. 785, 邦訳 130 頁）

つまり、現実を隠蔽するイデオロギーの機能が十分に知られているがゆえに人びとがいっそうイ

デオロギーを必要とするアナーキーと混沌を、アドルノはこの時期の流行歌から読み取っているのである。「流行歌分析」を「キッチュのイデオロギー的な性格」の分析（内藤（2013）68頁）とする解釈には容易に首肯できるが、「混沌の上にゆるく被さった覆い」を組み替え読み解く言語をアドルノが獲得する時期は30年代以降ではないか、と考えられる。

1-3. 1920年代の社会的観相学から世界大恐慌後の危機分析へ

以上のように、「流行歌分析」や後述する「マハゴニー」（1930）などの音楽批評を時系列で概観すれば次のような素朴な問いが浮かぶだろう。世界大恐慌時に「アナーキーの嵐」が吹き荒れているというのであれば、現実の社会秩序が危機に瀕している状態の叙述法と原因究明法を案出すれば良いのではないか。しかしながら、例えば同時代の経済学も1929年の時点では即座に危機分析を発表していないことは文献からも明らかである。J. A. シュンペーターが『世界大恐慌』を発表したのは1931年、J. M. ケインズ⁽¹⁰⁾が『世界的問題としての失業』を出版したのも同年である。

したがって次のように推測できる。まずは、言うまでもなく哲学と音楽の領域で仕事をしようというアドルノの明確な意志である。これは哲学、社会学、心理学、音楽という複数領域に関心を持ちつつフッサール現象学と格闘し、新ウィーン楽派のなかに自らの居場所を求めた1920年代までのアドルノの履歴に現れている。次に、作品それ自体の「内在的批評」の重視である。これは『アンブルッフ』の編集方針の一方の軸であったし、後年の文化批評の芽でもあるだろう。そして何よりも、1920年代の用語法と叙述法には、決定論に与しないアドルノの意図があったのではないか。それらは音楽批評を通じて新たな叙述法を模索した結果と考えられる。『楽興の時』で彼自身が回顧している通り、（社会的）観相学の試みである⁽¹¹⁾。社会的観相学（Physiognomik）については、最終講義となった社会学講義のまさに最終回で端的に述べられている。それは「たんなる存在と見えているもののうちに生成の相（Gewordensein）を認めることに等しい」（Adorno（1993）S. 245, 邦訳 251頁）のであり、所与のうちに歴史を見ること、「諸現象のうちに生成してきたものを、静止に至った力学を、認める」（Adorno（1993）S. 244, 邦訳 250-251頁）方法、社会学における解釈の能力なのである（a.a.O.S）。

ただ、この時点では物象化の事態はある程度表現されているが、冒頭で述べた鍵概念、「交換」はまだ登場していない。これを探究するのが次節の目的である。

2. 1930年代 — 「交換価値」の登場

1930年代初頭の2つの講演は、経済学者たちとはむろん異なる方向から同時期の資本主義世界の変動の認識を描出しようとしたものと捉えてもよいだろう。それらは直ちに危機分析ではな

いが、とはいえ「哲学のアクチュアリティ」冒頭の一文にあるように、「思考の力によって現実の総体を把握することができるという」（GS1 S. 325, 邦訳 2 頁）様々な哲学的企ての出発点に位置する幻想を痛烈に指弾するところから議論が始められる。その意味では明らかに議論の基調をなしているのは哲学の危機、理性の危機という認識である。理性の限界をアドルノはこのように叙述する。「現実の秩序と形態があらゆる理性の要求を打ち砕いているのですから、正当化をこととする理性がそのような現実のなかで自分自身を再発見することなど不可能でしょう」（ebd.）。それでは、こうした認識を背景に「交換」がどのように登場することになるのか、その文脈を見ていこう。

2-1. キルケゴール論と「交換価値」の初出

アドルノは P. ティリッヒのもとでの教授資格取得を見込んで 1930 年の初頭からキルケゴール論に集中的に取り組み、10 月に草稿を終えているが（Klein (2011) S. 476）、確認されるかぎり、「商品」と「交換価値」の初出は同第 II 章「内面性の構成」の「情況」である⁽¹²⁾。

「あの『状況』が露わにする『現存するもの（das Bestehende）』の現実の根底とは、しかし、社会生活が物象化し、現実が人間から疎外され、もはや商品としてしか彼のもとへもたらされることのなくなってしまうことの認識にほかならない。これがキルケゴールの主観＝客観関係の傾向を明らかにしてくれる。彼の哲学においては、認識する側の主観は、その客観の側の対応者にもはや到達することができない——ちょうど交換価値に占拠された社会において、『直接性』の状態にあるモノたちが、人間には手が届かなくなってしまうように。」（GS2 S. 59, 邦訳 75 頁）

あの状況、すなわち「始まろうとする盛期資本主義時代」（ebd.）のもとでの「無力にもはかない主観・客観の不二の相としての『情況』」（GS2 S. 61, 邦訳 77 頁）が暴露する現実の秩序の根本にある認識とは、生の物象化の結果、人間に対して現実の商品としてしか現れないという認識である。それは、交換価値が占拠した社会（後のアドルノの中心概念「交換社会」の原型と見てよいだろう）においてモノたちは直接性＝無媒介の状態では人間と接することがない状態に等しい。事物はつねに交換によって媒介され商品としてしか現象しない。

こうした認識それ自体はさほど新しいものではなく、むしろマルクス思想の常識的な理解と言える。ただ、それをマルクスの同時代人キルケゴール思想のうちに看取した点が興味深い。上記引用箇所が続いて、アドルノはキルケゴールの『キリスト教の修練』（1850）中に「観察」という行為にともなう主体の忘却と客体への限りない没入を見て取っている（GS2 S. 59-60, 邦訳 75-76 頁）。ここでキルケゴールは（アドルノが依拠している Eugen Diederichs 版では）対象への

限りない接近の中での自己自身の忘却という表現を用いており⁽¹³⁾、「すべての物象化は忘却である」という後のアドルノの物象化論の淵源はここに求めてもよいとも考えられる。

また、同章「インテリア」にも「商品」について述べられた箇所がある。

「自己はまさに自分の領土の中に逃げ込みながら、商品たちに、そして商品の歴史的本質に追い詰められる。商品の虚像（仮象 Schein）的性格は、歴史的＝経済的に、事物と使用価値との疎外によって産み出された。しかしインテリアの中に入ると、事物たちは無縁のままではない。それは事物から意味を誘い出す。疎外されたものたちにはまさに疎外態こそが表現となり、唾者は『象徴』となって語り出す。住居の中にものを調えることを、配置という。」（GS2 S. 65, 邦訳 83-84 頁）

交換価値に占拠された社会において、主体は内面性に在り処を見出すほかない。商品世界から隔絶された安全なインテリアの世界で、事物は疎外された形態においてこそ意味をともなって主体に迫る。キルケゴール論中でアドルノが配置（Konstellation）というベンヤミンに強く影響を受けた語を用いている点は注目されるべきである。

さらに第Ⅲ章「内面性の解明」の冒頭節「社会学のために」では、「私人」キルケゴールの逆説的な特性が描かれている。

「結局は彼もまたその『偶然』に身を任せるほかなかった経済的生産活動の場から排除されているという立場に、キルケゴールの、現代の観点からすれば『プチ・ブルジョワ的』な特徴が相応する。すなわち、物象化への無力な憎悪である。物象化の過程においては、ただ資本主義的な強者だけが、カール・マルクスの言にならえば、『居心地よく、また認められている』と感ずることができる。なぜなら、強者は『疎外』の状況を彼『自身の力』だと思い、『その疎外の中で、人間らしい生活という外見（仮象）』をまとっているからだ——疎外の状況はこの仮象を、私人に対してはただ撤回をちらつかせながら与えるにすぎない。」（GS2 S. 71, 邦訳 92 頁）

キルケゴールの生活は、安全圏を辛うじて確保しているとはいえ、恵まれたものではなかった。そこに見られるのが、「物象化への無力な憎悪」であり、「物象化の必然性や正当性を分析せず、その是正の可能性を探ることもしなかった」（GS2 S. 59, 邦訳 75 頁）キルケゴールに唯一なしえたことだったのである⁽¹⁴⁾。

交換価値は人間関係の直接性にも歪みをもたらす。キルケゴールの隣人愛を批判的に引用して、アドルノはこのように述べる。

『一人ひとりが本当に自分自身を愛するように隣人を愛するなら、人間たち間の平等は無条件に完璧に達成されているだろう』。それは達成されはしないだろう、交換価値の支配と分業と労働の商品的性格が人間関係を歪め、もはや隣人が隣人に対して、一瞬よりも長く直接的な身近さで関係しあえなくなっているところでは——個々人の善意だけでは隣人を助けることもできず、まして社会構造に働きかけることなど不可能になっているところでは。ゆえにキルケゴールの倫理学は、対象が不在なのである。」(GS2 S. 75, 邦訳 97-98 頁)

ここで「交換価値」はやや唐突に登場しているが、「分業」と「労働の商品的性格」と並列されている点を見れば、アドルノが強調しているのは「圧倒的に強大な資本主義的外界」(GS2 S. 72, 邦訳 93 頁)のなかで変容せざるをえない人間(私人)という図式であることがわかる。キリスト教で唱えられるような愛の相互性(ないし交換可能性)が交換価値に置き換えられている。労働する存在としては平等だが、人格の平等は達成されていない。こうした資本主義世界の叙述という点では常識的な用語法と言えるだろう。

以上のキルケゴール論での「商品」というカテゴリーの登場については、アドルノ自身がベンヤミンのパスージュ論へ批判的コメントを寄せた際(1935年6月5日)に言及している(Adorno und Benjamin (1994) S. 123, 邦訳 101 頁)。ベンヤミンによるキルケゴール論の書評(『フォス新聞』1933年4月2日)は最大級の賛辞で締め括られているが(「…この書物は、飛躍の翼をもった思想が批判の蛹化というかたちで立ち現われてくる、あの類稀なる処女作たちの等級に属している」(Benjamin (1972) S. 383, 邦訳 286 頁)), アドルノの提示した内面性概念はベンヤミンにも影響を与えてゆくことになる。ベンヤミンはこのように述べている。「…キルケゴールの内面性は、その明確に規定された場所を、歴史と社会のなかに与えられることになる。この内面性のモデルが、歴史的な相貌と神話的な相貌とが互いに入り込み合っている、^{ブルジョワ}市民的室内である」(Benjamin (1972) S. 382, 邦訳 285 頁)。

アドルノが見たキルケゴールは、資本主義世界を批判することのできない地点に身を置く(GS2 S. 72, 邦訳 93 頁)がゆえに私人の世界に籠ることができた存在だった。そうした客体なき内面性が逆説的に資本主義批判の立脚点たりえたのである。

2-2. 就任講演における「商品形態の構成」

ところが、キルケゴール論を教授資格論文として提出しフランクフルト大学の私講師に就任して行なった約半年後の講演、「哲学のアクチュアリティー」(1931年5月)では事情は異なる。就任講演は、全体性把握を目指した哲学の企てが挫折したという認識のもとに新たな哲学のプログラムを提示する狙いで行なわれた、若きアドルノの野心的な講演である。まずアドルノは、哲学と科学の違いを明示する。

「…個別科学が自らの発見…を解消不可能なもの、それ自体として安定したものとして受け入れるのに対して、哲学は自分の出会う最初の発見からしてすでに、解読を求めている暗号 (Zeichen) として把握する、ということです。簡潔に言いますと、科学の理念は研究であり、哲学の理念は解釈 (Deutung) なのです。」(GS1 S. 334, 邦訳 18 頁)

では、この解釈は実際にどのように遂行されるのか⁽¹⁵⁾。アドルノは「判じ絵の謎解き」、すなわち「問いのうちに散在している個別的な要素を、そこから答えが不意に現われるとともに問いが消失するような形象 (Figur) へとまとまるにいたるまで、さまざまな配列でためてみること」(GS1 S. 335, 邦訳 21 頁)、「…判じ絵の形態を一瞬の稲妻のもとに照らし出し、止揚すること」(ebd.) という表現で説明を試み、ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』(1927) を参照しながら哲学の課題について次のように述べる。

「哲学の課題とは、現実のもっている、隠れた形ですでに存在している意図を探究することではなく、意図なき現実を解釈することです。哲学はこの解釈を、現実のばらばらの諸要素を形象や図像へと構成することによって果たします。」(ebd.)

哲学は現実の全体を把握することはできず、現存在の秘められた意図を探ることはできない。断片となった (あるいは断片としてしか認識できない) 現実を形象へと形作ること、これが哲学の課題なのである。したがって、そうした社会の哲学は経済学へと歩みを進めることになる。

「…進歩した社会哲学の経済学への転換も、たんに経済学の経験的な優位に由来するのではなく、哲学的解釈それ自体の内的な要請に発してもいるのです。」(GS1 S. 336, 邦訳 23 頁)

邦訳者はこの箇所「ヘーゲルからマルクスへの移行」を看取しているが (38 頁)、この直後に「商品形態の構成」という論点が登場する。

ここでアドルノは「思考実験」で「実際に実行可能だと主張する」わけではないと留保しながらも、哲学が行ないうる、意図を欠いた現実の「解釈」のひとつの例として「商品形態」という形象を、ルカーチの物象化論 (物自体という問題成立の社会的諸条件)⁽¹⁶⁾ を批判しつつ議論を導入している。

「…商品形態が十二分に構成されるならば、それをまえにして物それ自体という問いが消失するということは、ありえることではないでしょうか。すなわち、商品および交換価値の歴史的な形象が、一つの光源にも似た形で、現実の姿をありありと照らし出すということです。

この現実の背後の意味をもとめて、物それ自体という問題をめぐる探究が続けられてきましたが、それは空しい努力でした。なぜなら、そのつど一度きりではじめて問われる歴史的な現象と切り離しうのような背後の意味など、現実のうちには存在しないからです。」(GS1 S. 337, 邦訳 23-24 頁)

見られる通り、キルケゴール論と就任講演との間には、約半年という短期間にも関わらず一種の飛躍がある。すなわち、商品や交換価値の比較的常識的な用語法から商品形態の構成を「解釈」の一形態として用いることへの飛躍である。後者は『ドイツ悲劇の根源』の影響と見ても良いが、1935年にパサージュ論に対して批判的コメントを寄せているところから看取できる通り、交換価値の理解そのものについてはベンヤミンからの影響よりはアドルノ独自のものである可能性が高い。

アドルノに宛てた手紙の中で、ベンヤミンは（ブロッホと若干異なり）この講演に高い評価を与えており、これを「ぼくらのグループのもっとも本質的な思考」と表現している⁽¹⁷⁾。アドルノがこの講演で「商品および交換価値」を導入している背景には、1923年以来緊密に保持されてきたベンヤミンやブロッホらとの交友と相互の影響関係が存在したと考えられるが、ベンヤミンが1933年3月にベルリンを去る際に、彼宛の「1933年初頭までのアドルノの手紙がすべて失われている」(Adorno und Benjamin (1994) S. 450, 邦訳 359 頁) ために、アドルノがどのように応じたのかは不明である。1930年10月から1931年5月までの間に、上記の飛躍を可能にしたいかなる思想の交流や受容、熟成があったのか、現存する資料からの追跡は現時点では困難である。『哲学ノート』を除いて、アドルノにはいわゆる日記を書く習慣がなかった。キルケゴール草稿と『哲学ノート』の公刊が待たれる⁽¹⁸⁾。

ただ、文献の成立史から一步踏み出して述べるとすれば、アドルノの就任講演は伝統的観念論の崩壊後、フッサールの現象学を乗り越えて登場したハイデガーの存在論との対決⁽¹⁹⁾であり、商品形態という布置連関による物自体をめぐる問いの消失可能性、現象界と背後世界という観念論の図式に対する批判という、きわめてラディカルな戦略を採っている。一種の構築主義にも通じる（との誤解を招きかねない）本質論批判、いわば擬装された本質論に対する批判と言えよう。

言うまでもなく、ここでアドルノは商品形態の構成による使用価値の消失ないし質的なもの（後の「非同一的なもの」）の滅失を指摘しているわけではなく、物象化を追認しているわけでもない。そうではなく、物が商品として構成されてゆくなかでどのように交換過程に組み込まれてゆくのか、何が削ぎ落とされてゆくのかを商品形態の「歴史的な形象」に看取することを、本質論の不可能性が露呈した後に哲学が行ないうる解釈の一例として挙げているのである。

「小さな、意図なき諸要素を粘り強く組み合わせる」(GS1 S. 336, 邦訳 23 頁) 方法が、哲学の新たなプログラム、なおかつ唯物論と限りなく近接するプログラムのひとつであるならば、商品

形態の構成がその一例になりうるというアドルノの主張は物象化への対抗戦略として理解可能なものである。すなわち、ここで商品形態の構成がその一例として挙げられている方法とは、崩壊した意図なき現実を布置 (Konfiguration) によって解読するなかで別様に組み替える方法であり、講演中で哲学と社会学との関係について言及している通り (GS1 S. 340-341, 邦訳 29-31 頁), 諸科学から提供されたさまざまな素材を想像力によって並び替え組み替える方法である。それを行なうのが解釈としての哲学の役割である。哲学に不可欠の想像力は「その諸要素の領域を超え出ることなしに、諸要素を繰り返し編成しなおすのであって、問いの消失という形でその想像力の精密さは検証されるのです」(GS1 S. 342, 邦訳 33 頁)。

商品形態の構成を解釈としての哲学に重ね合わせるこうした表現には、アドルノが物象化のただなかから物象化を乗り越える方途を模索している過程が伺える。主体には意図なき現実としてしか現象しないモノの偶然的な世界を「商品形態」として構成するという思考実験には、おそらく二つの意味がある。第一には、先述した観念論批判である。商品形態の構成によって、現象界 / 背後世界という二分法は無意味なものとなり、物自体の追究という観念論のプロジェクトは意義を失う。

第二にはモノの世界の新たな構成である。『資本論』初版のマルクスの場合、商品形態は「使用価値と交換価値の直接的統一であり、それゆえ二つの対立物の直接的統一である。したがって商品是一種の直接的な矛盾である」(Marx (1983) S. 51, 太文字箇所はゲシュペルト) と捉えられている。「十二分な構成 (zureichende Konstruktion)」とはこのように直接的に統一された対立物の間の矛盾を駆動し、「第三のもの」への還元の機序を直視することによって、「問いの消失」へと至ることを意味するだろう。マルクスはこう述べていた。「…二つの物は、それ自体では一方でも他方でもない第三のものに等しい。したがって、二つの物のどちらも、それが交換価値であるかぎりでは、他方の物とは独立に、この第三のものに還元されうるものでなくてはならない」(Marx (1983) S. 19)⁽²⁰⁾。すなわち、交換に際して何が第三者に還元され何が還元されえないのか、還元されえないとすれば、交換の外部でどのように使用価値のまま、あるいは使用価値でもないモノのままでありうるのかが直視されねばならないだろう。

だが、形態 I から IV までに至る商品形態の十二分な構成、第三のものへの還元という交換のはたらきによって物自体への問いが消失したとしても、使用価値が救出されうるか、その固有さが(交換の外で第三者に還元されないままで)認められうるかは別の問題である。むしろ、想定不可能な背後世界と「自然」や「質的なもの」とが同一視され、後者について言及が不可能になる危険性も否定できない(こうした論点は、牽強付会ではあるが、非同一的なものは肯定的には捉えられえないと述べる『否定弁証法』のアドルノと通じるものがある)。この点が、アドルノがあくまで「思考実験」と留保した理由だったのではないだろうか。アドルノが問題にしたのは構成のあり様と作用であって、構成の対象ではない。

いずれにせよ、アドルノがここで強調しているのは、ハイデガーの基礎的存在論のような直接性の探究の不可能性である。存在論に商品形態の構成を対置している点で、ハイデガーとマルクスとの対質を意図的に演出していると考えられる。それこそ、布置によってハイデガーの意図を脱構築しようとしていると読むことができよう。

2-3. 消費のアナーキー、崩壊した言語

では、交換価値や商品形態のこうした理解を推し進めたもの、いわばその淵源ないし問題圏を探るべく、1930年10月頃から1931年5月頃の間には執筆されたと考えられる文献に絞り込んでさらに検討しよう。この時期の音楽批評にはいずれも交換価値の理解に関連する表現が見られるが⁽²¹⁾、「マハゴニー」(1930)は、B. プレヒトとK. ワイルによる『マハゴニー市の興亡』を先鋭的に批評しており、交換価値の理解と最も響き合うだろう。ここに見られる資本主義のアナーキーの叙述は、この時期のアドルノが方法として自覚的に用いていたかは別として、後年のアドルノが回顧している通り「観相学」の典型例である。貨幣なき者の集う世界、マハゴニー市の物語においては、「法と秩序と道徳でかためられた現体制が、アナーキーであることが見破られている」(GS17 S. 114, 邦訳 170 頁)。マルクス主義——マルクスではない——が析出した商品生産のアナーキー、すなわち労働生産物からの労働者の疎外は資本主義を貫徹しているが、盛期資本主義のもとで今や生産過剰に至り「消費のアナーキー」を惹起する。

「マルクス主義の分析がえぐり出した商品生産のアナーキーは、消費のアナーキーというかたちで投射され、圧縮されて、経済分析ではとうていあたえられないようなそら怖ろしい相を呈している。」(GS17 S. 115, 邦訳 171 頁)

人間関係の物象化が進み、完全に交換可能になっている世界（マハゴニーの売春宿における娼婦たちと一文無したち）の叙述は、経済学の描出を超え出ている。

「しかし転位 (Verschiebung) のメカニズムは、盲目的な夢のそれではなく、厳密に、未開の西部と交換価値の世界を一つに結び合わせる認識にもとづいて、運ばれるのだ。それは、現体制の根底をなす暴力に関するそれ、また秩序と暴力が対立しつつ重なり合っているあいまいさについての認識である。神話的な暴力と神話的な正義の実体が、マハゴニーでは大都会の石塊の影から追い立てられ、裸にされている。両者の逆説的な重なり合いが、プレヒトによって明るみに引き出されるのだ。」(ebd.)

交換価値の支配する世界は、異質なものが交換可能になることで秩序を成立させるが、同時に交

換という暴力を強いる。すべてが交換可能になり、貨幣なき者は交換不可能性のただなかで立ち尽くすほかない。したがって、「資本主義の叙述とは、より正確に言えば、資本主義に内在するアナーキーの弁証法による、その没落の叙述である」(GS17 S. 116, 邦訳 172 頁)。

以上のように、音楽批評から読み取られうる交換価値理解と触れ合う要素は、抽象化や階級社会の崩壊可能性への言及が見られたり、「布置」に近い表現が見られるものもあるものの、些か断片的なものである⁽²²⁾。むしろ、執筆年は明記されていないが編者 R. ティーデマンによって 30 年代初頭と推定されている (GS1 S. 383)「哲学者の言語についてのテーゼ」が本質的に最も近い論点を提示していると考えられる。そこでアドルノはハイデガーを批判しながらこのように述べる。

「こんにち哲学者が向き合っているのは崩壊した言語である。哲学者の素材をなしているのはさまざまな言葉の残骸であって、彼は歴史によってそれらと結びつけられている。哲学者の自由はひとえに、この残骸に残されている真理の強制力にしたがって、それらを布置へと構成する可能性のうちにのみある。彼はある言葉を所与のものと考えてはならないし、またある言葉を発明してもならない。」(GS1 S. 368-369, 邦訳 92 頁)

こうした言語観の後景をなしているのは「アトム化され崩壊してしまっている社会」(GS1 S. 367, 邦訳 89 頁)という現状認識である。アドルノはこう語る。「同質的な社会であれば、哲学の言語の分かりやすさなどけっして要請されたりはしない。せいぜい、そういう分かりやすさが現に存在している、ということだろう」(ebd.)。崩壊した社会と崩壊した言語のなかで、哲学者は言葉を自明のものとしても、ハイデガーのように言葉を発明してもならない。ただ、言葉の残骸を布置へと構成する可能性のみ手中にしているのである。「事物を任意に名指すことができるということ、これこそは観念論的な意識によって生じるあらゆる物象化 (Verdinglichung) の印である」(GS1 S. 366, 邦訳 86 頁)。

このような言語観と布置の可能性、物象化の認識と仄かに見えるその克服可能性 (布置による名称の再構成) は、先述した商品形態の構成に近接している。邦訳者の細見が指摘するように、ここには確かにベンヤミンの言語論の影響が見られるだろうが、布置連関と商品形態とを (慎重に留保を付しながらも) 結びつけようとするのはアドルノ独自の発想と言えるだろう。

しばしば誤解される点だが、交換過程と思考過程との相互作用というアドルノの着想は、確かに A. ゾーン＝レーテルとの交流のなかで深化していったものの (この点にホルクハイマーは懸念を示していたが)、その完全な影響下で成立したものではない。両者の文通が始まったのは 1936 年からだからである (Adorno und Sohn-Rethel (1991))。

したがって、アドルノの「交換」理解は、当時受容されていた「マルクス主義」と異なること

は言うまでもないが、ベンヤミンやホルクハイマー、ゾーン＝レーテルといった同時期のインフォーマルなサークルの影響のもとでのみ成立したのではなく、成立を可能にした飛躍の文献上の後付けを欠くものの、アドルノ思想の独自性が強く見られるものと捉えてよいだろう⁽²³⁾。

3. 戦間期のアドルノとマルクス思想 — 影響と分岐

それでは、前節までの検討を通じて明らかになった戦間期のアドルノとマルクスとの思想上の影響関係を「交換」を軸に考察しよう。

3-1. 「交換」と物象化

アドルノは「交換」を多用し、その社会理論のみならず否定弁証法などにおいても決定的な概念の一つとして用いている。これはマルクスの「交換価値」の直接的借用とは考えがたい。というのも、マルクスの場合、交換価値概念は資本主義的生産様式の批判的分析へ向けた政治経済学批判の文脈で主に用いられるのに対して、アドルノの場合、「交換」は機能的に編成された社会（この限りで社会の構成員は平等である）記述に際して用いられる記述的概念であるとともに、そうした概念に包摂されえないものを描出しようとする認識論批判の梃子でもあるからだ。だからこそ、同一性原理に回収されえない「非同一的なもの」に、アドルノは認識論批判の希望を託したのである。したがって、例えば W. シュトレークがアドルノの交換社会（Tauschgesellschaft）に“catallactic society”との英訳を当てている点（Streeck (2016) p. 244, 邦訳 338 頁）は半分は正しく、半分はアドルノの社会理論の意味を捉え損なっていると言える⁽²⁴⁾。すなわち、「交換」は（資本主義）社会の構成原理であり、「社会化された社会（vergesellschaftete Gesellschaft）」（Adorno (1993) S. 57, 邦訳 60 頁）の根幹に位置するものだが、同時に抽象化という私たちの思考の原理と相互に作用するものでもある（交換に際しての抽象化原理と思考における抽象化の類比）。したがって、「交換」は相異なる事象や事物を包摂する概念であり、なおかつ概念に包摂しえないものを括り出し剰余を生み出す作用でもある。

また、以上の検討範囲内で物象化概念についても整理しておこう。戦間期のアドルノに見られる物象化概念は主に3つの意味を持つだろう。

第一に、音楽批評においても物象化の描出はある程度試みられているように考えられる。例えばシューベルト論においては、「存在する客観性の薄れかかった形象」（GS17 S. 24, 邦訳 32 頁）が物象化の現状を表現していると見てよいだろうが、形象の希薄化の原因となるものまで考察は及んでいないように思われる。むしろ、この文脈においては「主観的な内面性の力」（ibd.）がそうした形象を音楽の表現にもたらず点で克服可能なものとして描かれている。

第二に、キルケゴール論においては「社会生活の物象化」の結果、人間に対して事物は疎外態

としてしか現象しないと捉えられていた。これは、労働生産物が商品としてしか現象しないというマルクスに近い理解である。

第三に、言語論においては、事象と名称とが任意な関係性にあるという観念論の認識は物象化の表現だと考えられていた。これはベンヤミンの言語論の影響を強く受けている可能性があるとはいえ、ほぼ同時期の就任講演と並べて検討すれば、人間関係の物象化という次元とはやや異なる様相のものと考えられる。なぜなら、後者は資本主義世界が必然的に引き起こす事象であり、マルクスで言えば政治経済学批判の範疇にあるのに対して、前者は観念論批判（とりわけハイデガー批判）の目論見を持ったものであるからだ。

こうした物象化への対抗戦略としてアドルノが案出したものは、音楽批評の場合は音楽表現を可能にする主観的な内面性の力、キルケゴールの場合は内面性、言語論の場合は布置による名称の再構成である。

したがって、戦間期の物象化概念を概観する限りでは、希薄化する客観性の形象、圧倒的な資本主義的外界、消費のアナーキー、崩壊した言語というように、アドルノが「解釈」によって対峙しようとした当時の現実は、『啓蒙の弁証法』断章の「すべての物象化は忘却である」という表現が生み出されたコンテキスト、およびその表現が指すものに近づきつつあるとはいえ、まだ同じものではないと言えよう⁽²⁵⁾。

3-2. 偶然性

では、アドルノとマルクスが分岐する地点は何処に見出せるのか。ここでは、偶然性をめぐる把握の相違という仮説を提示しておきたい。

前節までの検討を通じて、アドルノ思想には二様の偶然性が見られたことが確認されただろう。第一に、キルケゴール論における偶然性である。私人は資本主義外界の事物の法則性、すなわち必然性を見ることができない。私人にとって外界は偶然的としか見えないが、そうした盲点に位置する内面性が、逆説的に物象化への対抗地点として浮かび上がる。

また、言語論における偶然性もほぼ同様の文脈から捉えられる。例えば次の引用文を参照されたい。

「〔観念論という〕この思考にとって、名称は意識が好き勝手に定立したものである。主観的に構成された概念の統一が存在として見れば『偶然的なもの』であるということ、そのことは、その概念に付与される名称が交換可能なものであるという点に明瞭に見て取ることができる。」(GS1 S. 366, 邦訳 87 頁)

すなわち、観念論が定立する名称は事象 (Sache) に即したのではなく、名称と事象との結合

は必然的ではないというのである。これらの結合が崩壊した（偶然的であることが露呈した）言語の前で、哲学が行なうべきは布置による名称の再構成となる。偶然性が必然性と不可能性の二重の否定であるとすれば、いずれも前者の観点に近い。

第二に、アドルノが体験した歴史的偶然性である。晩年のアドルノは、青年期の体験をこのように回顧している。

「歴史の無限に不透明で幾重にも非合理的な構造のなかで、〔スパルタクス蜂起やドイツ農民戦争やバブーフの陰謀のような〕これらの運動が実際の歴史とは別の結果となりえたかどうか、そして人類が歴史の汚辱から本当にみずからの力で脱出できたのかどうかについて言うことは、きわめて難しいです。私自身は青年時代に、歴史が別様にありえたかもしれない、ぎりぎりの瞬間を経験したと思っています。」（Adorno (2001) S. 250）

これは不可能性の否定に近く、偶然性が胚胎する可能性の側面である。

「交換」から見ると、必然性の否定としての偶然性は把握しやすい。というのも、偶然性は交換世界の盲点と捉えられるからである。抽象化作用という交換原則が見えないところ、そこにこの偶然性のある場がある。この点では、この偶然性と剰余、非同一的なものはいずれも類似の相にあるだろう。

これに対して、不可能性の否定としての偶然性、別様でありうるという偶然性を交換世界に位置づけようとする場合、この偶然性は交換の強制力に服すが、可能態としての偶然性は縮減される。いわば、偶然性は交換世界の法則性と組み替え可能性とのあわいにある。

以上のような偶然性をアドルノは社会理論においてもその中心に位置付けたのだが、マルクス思想が胚胎していた必然性への視座をアドルノはどのように捉えたのだろうか。戦間期のアドルノの文献に即した検証は困難であるため、戦間期からは離れることになるが、『否定弁証法』のアドルノはマルクスの歴史的必然性の把握を次のように批判的に捉えている。

「歴史的必然性とは現実と化した仮象であり、歴史的決定論は形而上学的で偶然的なものにすぎないことが認識された時にのみ、理論はこの必然性の無量の重荷を動かすことができる。こうした認識は歴史〔を聖化する〕形而上学によって妨害される。だが、迫り来る破局には、非合理的な破局が当初からあったのではないかという推測のほうが、むしろ相応している。今日では、別な世界（das Andere）が来る可能性は破綻し、それはもう、ともかく破局を回避する可能性があるかどうかにかんして収縮してしまっている。」（GS6 S. 317, 邦訳 391 頁）

この箇所は明らかに歴史的偶然性について述べている。資本主義の経済法則のもとで、別様であ

りうる可能性は現状を辛うじて切り抜く可能性へと縮減し、歴史的必然性の支配下にある。アドルノはこうした眼差しを逆転させ、歴史的決定論の偶然性の認識に与しようとする。上記の引用文の直前でこのように述べている。

「事態が別のものになりえた時、すなわち、個々人から強奪された普遍的なものを実体化した、『社会的に必然的な仮象』にすぎない全体が、その絶対性の自負を打ち砕かれた時のみ、批判的社会意識は『いつか世界は違ったものになるかもしれない』と考える自由を与えられる。」(ebd.)

すなわちイデオロギーとしての全体への信頼が失われた時にこそ、「別様でありうる可能性」について思考する自由が得られる。それは、普遍性に制圧されていた特殊なものが特殊かつ多様でありうる可能性について思考できる刻なのかもしれない。こうした全体性批判と偶然性への視座は、全体性把握の失敗を端緒に議論を始めていた就任講演から四半世紀の時間を経ているとは思えないほど近いところにあるだろう⁽²⁶⁾。

おわりに

以上のように戦間期のアドルノにおける商品形態と交換価値との登場を概観したが、それらがすぐさまアドルノ思想に固有の「交換」⁽²⁷⁾に結実するわけではない。キルケゴール論は比較的常識的な商品概念の理解を示しており、就任講演における「商品形態の構成」という論点提示は思考実験とはいえ些か問題含みのものであった。晩期アドルノの中心概念となる「交換」の彫琢は、おそらくは15年に渡る亡命期とその間の啓蒙の弁証法プロジェクト、またアドルノの意に沿わなかったものの、結果として戦後ドイツ社会学の発展に寄与することになったアメリカでの社会調査(P. ラザースフェルト主導のラジオ・リサーチ・プロジェクトから『権威主義的パーソナリティ』まで)の経験を経てのことなのではないだろうか。さらなる検討が必要である。

本論文で行なったテキスト分析は、時系列とはいえ主要テキストに限定しており、分析の斉一性とテキスト選定基準の問題を抱えている。また、マルクス思想についても、あくまでアドルノから見たマルクスという印象は払拭できないものと考えられる。しかしながら、それでも戦間期のアドルノ思想に差していたマルクスの影の範囲と深度はある程度明らかにできたのではないだろうか。すなわち、戦間期のアドルノにとってマルクスは、社会的観相学から発して新たな叙述法を案出する際の不可欠の参照点のひとつになり、自らの社会哲学と社会理論を展開する足掛かりとなったのである。マルクス思想は、ただ資本主義社会に対峙する際のアプローチと語法になったわけではなく、アドルノ思想が用いる布置のひとつだったと見てよいだろう。

より根本的な問題、例えば交換社会という概念の現代的意義について、上記で試みた方法と検討結果を飛び越えてここで問うことはできない。新自由主義という新たな政治経済レジームが登場する以前の資本主義のかたち、すなわち戦間期のハイパーインフレの経験と相対的安定期、世界大恐慌と戦後の「経済の奇跡」に強く刻印された社会の経験を概念にしようとするもの、それがアドルノの「交換社会」だからである。もっとも、最近の資本主義史が明らかにしているように (Kocka (2017)), 新自由主義レジームは突如出現したものではなく、それまでの資本主義との異種の接合のなかで生成したために、資本主義の変容可能性を検討する際、アドルノの「交換社会」も不可欠の参照点のひとつをなしているとは言えよう。資本主義の一義的な規定は困難ではあるものの、Fraser / Jaeggi (2018) が主張するように、「制度化された社会秩序」と特徴づけられるとすれば、アドルノの交換概念もその接合子のひとつであるのかもしれない。資本主義が異種の接合を繰り返して延命するのであれば、人格を単なる労働力に削ぎ落とし私たちの思考をも形作り、しかしながら同時に商品世界の別様の組み替え可能性をも胚胎する「交換」⁽²⁸⁾もまた、アドルノが生きた新自由主義レジーム以前の世界の刻印を強く受けながらも、一定の歴史的意義を持つだろう。

《注》

- (1) アドルノの社会理論は、T. パーソンズなど同時代の社会学理論と比較して体系的であるわけではなく、社会的観相学とやや本質論に傾斜した社会分析との非-整合的構成と見てよいだろう。その評価も含めて、表 (2013) を参照されたい。
- (2) なお、アドルノのゼミを近年のドイツ語圏でのマルクス再読の源流のひとつに位置付けるものとして、Larsen / Nilges / Robinson / Brown (2014) を参照されたい。彼のゼミにはバックハウスの他に H. ライヒェルトが参加していたとのことである (p. xlix)。
- (3) アドルノは、知的活動の最初期はヴィーゼングルント (ユダヤ系の父の姓)、20 年代にはヴィーゼングルント = アドルノ、その後はアドルノ (コルシカ島にもルーツがある母の姓) と名乗っており、この変遷そのものが彼の複数のアイデンティティと生存戦略を示しており考察の対象となりうるが (「ユダヤ的なもの」を回避したかに見えるこの履歴が H. アーレントにある種の疑念を持たせる契機になったのかもしれない)、煩雑さを避けるため本論文ではアドルノに表記を統一する。
- (4) クラカウアーとの往復書簡中に何かしらの言及の可能性はあるため、さらなる探究が必要である。
- (5) ザロモン (後にザロモン = ドゥラトゥーアと名乗る) の社会学プロジェクトについては、表 (2015) を参照されたい。
- (6) こうした筆致の難点については、シューベルト論を『楽興の時』に再録する際、アドルノ自身が回顧している。「いろいろと不細工なところがあり、哲学的な解釈 (Interpretation) が、作曲技法上のさまざまな事実をなおざりにして、あまりに生なかたちで出ているといった難点」(GS17 S.10, 邦訳 8 頁)。
- (7) シューベルト論と Motive III はベンヤミンもブロッホも切望していた (Adorno und Benjamin (1994) S.11-12, 邦訳 11 頁)。
- (8) アドルノによる『アンブルッフ』の再編計画については内藤 (2013) を参照されたい。
- (9) この削除箇所については表 (2015) 脚注 17 ですでに言及したが、十分に検討していない。
- (10) ちなみに、ケインズはアドルノの父親、オスカー・ヴィーゼングルントと「緩やかな関係」を持つ

ていたようである。ナチス・ドイツから逃れるべくアドルノがイギリスに活路を見出そうとした際（結果は「研究生」という不本意なものだったが）、ケインズは W. ベヴァリッジへ手紙を書いている（1933年9月28日）。「私は T. L. ヴィーゼングルントを個人的には知りませんが、その父親は数年前から僅かばかり知っております。書類を見たところ、彼は哲学、特に美学理論を稀有な音楽的才能や資質と結びつける、かなり極立った天分を持っていると言えましょう」（Müller-Doohm (2003) S. 285, 邦訳 218 頁）。アドルノを知悉していなかったとはいえ、20 年代に早くから音楽家として活躍し、フランクフルト大学の哲学の私講師として就任したばかりのアドルノの才能をケインズはおそらくは CV から感じ取ったのかもしれない。なお、晩年のアドルノは講演中でケインズ政策を両義的に評価している（「新たな右派ラディカリズムの諸相」（1967年4月6日）。「[SPD が自認している] ケインズ主義、ケインズの自由主義は、一方で古典的なマルクス主義理論が持っていたような、社会構造を変える潜勢力を秘めているものの、他方で、先ほどお話ししたような階層〔主観的な階級意識としてはブルジョワ的だが永続的に下降しつつある階層〕にとって、いずれにせよ結果として窮乏化の恐れを強めるのです」（Adorno (2019) S. 441）。この後アドルノはケインズの拡張政策の帰結としてのハイパー・インフレと技術的失業について述べている。

- (11) 「クシェネック、ワイルの『マハゴニー』、ツィリッヒの『ヴェルレーヌ歌曲集』などについての小論は、分析的というよりも、観相学的な性質（physiognomisch）を帯びている」（GS17 S. 11, 邦訳 11 頁）。
- (12) もっとも、現在私たちが目にするキルケゴール論は、アドルノ・ベンヤミン往復書簡集の編者 H. ローニツによれば、1932年9月から11月までの間に改稿されたものであるため（Adorno und Benjamin (1994) S. 33, 邦訳 28 頁）、1930年の草稿に「交換価値」や「商品」の初出があったかは現在の資料では不明である。
- (13) 「…その人はまさに〔対象にできるかぎり接近しようとする〕この動きをすることによって、或る意味では自己自身のなかからぬけ出し、自己自身を離れ、自己自身を忘れさる。…観察もしくは考察の行為によってわたしは対象のなかにはいつてゆく（わたしは客観世界の一部となる）が、しかし同時にわたし自身のなかからぬけ出す、ないしはわたし自身を離れさる（わたしは主体たることをやめる）のである」（キルケゴール（1963）356 頁）。
- (14) この箇所はキルケゴール論で唯一のマルクスからの引用である。
- (15) なお、引用文に見られる「暗号」は、キルケゴール論では Chiffre だが、すでにキーワードとして用いられている（GS2 S. 40, 邦訳 47 頁）。
- (16) ルカーチの物象化については、「人間と人間との関わりあい、関係が物象性（Dinghaftigkeit）という性格をもつこと（Lukács (1923) S. 94, 邦訳 162 頁）」という論点を参照されたい。よく知られている通り、ルカーチが問題にしたのは「…一方では対象性形態としての商品の物神的性格から生じ、他方ではこの対象性形態に対応する主体の態度から生じてくる基本問題を指摘すること」（Lukács (1923) S. 95, 邦訳 162 頁）だった。
- (17) 「ぼくはあの講演について、ブロッホとも話し合ったし、かれからきみへの手紙も読ませてもらった。ぼくの考えをいえば、疑いもなくあの労作は、総体として成功しており、じつに簡潔なその叙述において、ぼくらのグループのもっとも本質的な思考を印象的に定着していて、アポリネールの言葉を借りれば、新時代ヲ画スルニ足リル万全の質を備えている。…きみがマルクシズムを杓子定規に『適用』することなく、それを運用していること、いいかえれば、ぼくらみんなのためにそれと格闘していることが見られるいたるところで、多分に立証できるだろう。」（1931年7月17日）（Adorno und Benjamin (1994) S. 16-17, 邦訳 15 頁）。
- (18) 例外的に書いていた Traumprotokolle と Tagebuch der Grossen Reise は出版されている。前者は死の直前まで折々に書き留められていた夢日記だが、1934年1月以降のため今回の傍証は得られない。後者は西ドイツへの帰国時から敗戦直後のドイツの様子、ホルクハイマーの代講で行なった社会理論講義などが記された興味深い日記だが、1949年10月以降のためやはり今回の傍証は得られない。

- アドルノ遺稿集収録予定の『哲学ノート』（全約5巻、現在未公開）から何らかの傍証が得られる可能性はある。
- (19) ちなみに、アドルノは1929年にハイデガーと初めてにして唯一の出会いを果たしている（Klein (2011) S.476）。
- (20) ちなみに、該当箇所は第3版では、第一の引用文が含まれる段落ごと削除されており、第1章「商品」はシェイクスピア『空騒ぎ』からの引用文で終わっている（Marx (1989) S.111）。第二の引用文は「他方の物とは独立に（unabhängig von dem andern）」という表現の削除以外は全く同一である（Marx (1989) S.69）。
- (21) 例えば「ラヴェル」（1930）には、階級社会に迫る危機の描写が見られる。「この社会〔大ブルジョワや貴族などの上流社会〕は、自らの拠って以て立つ基盤が掘りくずされてあぶないことを知っているし、破局の可能性をいち早く見込んでいるのだが、違ったものになることはできない、違ったものになるとは、自らを抹殺することにひとしいだろうからだ」（GS17 S.60, 邦訳88頁）。また、「新しいテンポ」（1930）には、作品の統一（の瓦解）について述べられるなかで、全体よりも断片を重視する表現が見られる。「…作品の統一ということは、われわれにとっての規範ではない。それは歴史において瓦解する。…われわれとしては、死んだ全体より、生きた残片のほうが有用なのである」（GS17 S.69, 邦訳101-102頁）。さらに、下記の表現は先に見た「布置」に相当近接しているのではないだろうか。「…全体の観点から言うなら、形式全体の観念というものは、たがいに直に関連づけて見られなければならない程度に部分がたがいに接近してこそ、形づくられるのである。そこから個々の部分についての、まったく新しい解釈の問題がいろいろと生じてくる。もちろん部分は消散してもよいというのではなく、全体のなかでそれが占める構造的な位置が分明になり、したがって、それ自体の構造もきわだってこなければならぬというわけだ」（GS17 S.71, 邦訳104-105頁）。
- (22) 「いくつかの反論」（1931年6月、*Die Musik* 23に掲載）は、6節すべてが「音楽的反動」への批判という挑発的なテーマだが、「抽象化」と題された節では、〈新しい音楽〉は素材との関係においては抽象的ではないと反論しながらも、冒頭に見るべき一文が置かれている。「抽象的なものについて語る場合には、いったいそれが何を捨て去っているかが、つねに問われねばならないだろう。〈新しい音楽〉に対して異議が立てられる場合、まさしくその点が黙殺されている」（GS18 S.26, 邦訳128頁）。
- (23) 「交換」の初出とその文脈がある程度確認できたため、「自然史の理念」（1932）と「音楽の社会的状況について」（1932）、さらに「音楽における物神的性格と聴取の退化」（1938）の検討は別稿を期したい。
- (24) ところで、シュトレックは「フランクフルト学派」をやや誤解している。ドイツ社会学会との距離やアドルノの社会理論の意図と意義など事実とは異なる認識が見られる。アドルノが哲学ゼミと社会学ゼミを開講していた1960年代にシュトレックは彼の講義やゼミに参加していた。アドルノはその頃『否定弁証法』の執筆と同時に自身の社会理論を展開しようとしていたが、シュトレックにはその意図は理解できなかったと言う（Streeck (2013) S.7, 邦訳7頁）。
- (25) さらに、本論文では検討できなかったが、アドルノのフッサール現象学との取り組みの中に見られた物象化論も検討の必要があるだろう。例えば青柳（2019）は、「…アドルノは、思考の一要素である論理的なものが対象化される事態を物化と呼んだのである」（青柳（2019）266頁）と解釈している。
- (26) アドルノとマルクスとの思想上の影響関係を考察する際に欠かせない諸概念、例えば資本主義や生産力・生産関係、イデオロギー、弁証法、自然史等の検討については別稿を期したい。ただ、『否定弁証法』ではイデオロギーと交換との関係について次のように明確に述べている。「イデオロギーというものは、分離可能な層として社会的存在の上にかぶさっているわけではない。それはむしろ社会的存在に内在している。イデオロギーは、交換過程に本質的に属する抽象作用のうちに根をもっている」（GS6 S.348, 邦訳430-431頁）。また、最近公開されたアドルノの講演「今日の個人と社会の関係について」（1957年2月13日）では『経済学・哲学草稿』（1932）や『ドイツ・イデオロギー』など初期マルクスへの言及が見られ、新たな考察のための資料が整いつつある（Adorno (2019) S.129-132）。

当然ではあるが、マルクス自身に即した偶然性把握の検討は本論文の問いを超え出ていると言わざるをえない。

- (27) 典型的には社会学講義や講演「社会」(1965)に見られる。例えば次の表現を参照されたい。「社会をそもそも社会的なものたらしめているもの、社会を特有の意味で概念的に構成するとともに、また現実的にも構成しているもの、それは交換関係であって、それが、社会というこの概念に関わるすべての人々を潜在的に統合しています」(Adorno (1993) S. 57, 邦訳 60 頁)。
- (28) 『否定弁証法』ではこのように述べられている。「生きた個々の人間を度外視することなしには、交換は不可能であろう。このため今日に至るまで、現実の生活過程の中に、必然的に社会的な仮象が内包されてきたのである。この仮象の核心は物そのものとしての、あるいは『自然』としての価値である」(GS6 S. 348, 邦訳 431 頁)。

参考文献

* 訳文は断りなく変更を施している場合がある。

- Adorno, Theodor W., (1970–1986) *Gesammelte Schriften*, hrsg. von Rolf Tiedemann unter Mitwirkung von G. Adorno / S. Buck-Morss / K. Schulz, Suhrkamp (=GS, [] 内は成立年)
- 1= “Die Aktualität der Philosophie” [1931] (=2011, 細見和之訳『哲学のアクチュアリティ』みすず書房.)
- 2= *Kierkegaard* [1933] (=1998, 山本泰生訳『キルケゴール』みすず書房.)
- 6= *Negative Dialektik* [1966] (=1996, 木田元他訳『否定弁証法』作品社.)
- 11= “Der wunderliche Realist” [1964] (=2009, 三光長治他訳『文学ノート 2』みすず書房.)
- 17= *Moments musicaux* [1964] (=1969, 三光長治・川村二郎訳『楽興の時』白水社.)
- 18= *Musikalische Aphorismen* (=2011, 細見和之訳『哲学のアクチュアリティ』みすず書房.)
- “Schlageranalysen” [1929] (=2002, 渡辺裕編『アドルノ 音楽・メディア論集』平凡社.)
- 19= “Nadelkurven” [1927] (=2002, 渡辺裕編『アドルノ 音楽・メディア論集』平凡社.)
- “Zum Anbruch” [1928]
- (1993) [1968] *Einleitung in die Soziologie*, hrsg. von Christoph Göttdé, Suhrkamp (=2001, 河原理・太寿堂真・高安啓介・細見和之訳『社会学講義』作品社.)
- (2001) [1964/65] *Zur Lehre von der Geschichte und von der Freiheit*, hrsg. von R. Tiedemann, Suhrkamp
- (2019) *Vorträge 1949–1968*, hrsg. von M. Schwarz, Suhrkamp
- und Walter Benjamin (1994) *Briefwechsel 1928–1940*, hrsg. von Henri Lonitz, Suhrkamp (=1996, 野村修訳『ベンヤミン / アドルノ 往復書簡 1928–1940』晶文社.)
- und Alfred Sohn-Rethel (1991) *Briefwechsel 1936–1969*, hrsg. von Christoph Göttdé, Edition Text+Kritik
- 青柳雅文 (2019) 「物象化論と論理絶対主義批判」, 『立命館大学人文科学研究紀要』118
- 麻生博之 (2010) 「批判と歴史」, 『哲学』61
- Backhaus, Hans-Georg (2011) “Theodor W. Adorno über Marx und die Grundbegriffe der soziologischen Theorie”, in: ders., *Dialektik der Wertform: Untersuchungen zur Marxschen Ökonomiekritik, ça ira*
- Benjamin, Walter (1972) *Gesammelte Schriften 3*, hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp (=2010, 浅井健二郎訳「キルケゴール」, 『ベンヤミン・コレクション 5』ちくま学芸文庫.)
- Fraser, Nancy / Rahel Jaeggi (2018) *Capitalism: A Conversation in Critical Theory*, Polity.

- 細見和之 (1990) 「アドルノにおける自然と歴史」, 『カンティアーナ』 21
- 岩熊典乃 (2016) 「初期フランクフルト学派と『自然に対する社会的諸関係』の危機」, 『経済社会学会年報』 38
- キルケゴール, S., 杉山好訳 (1963) 『キリスト教の修練』 白水社.
- Klein, Richard / Johann Kreuzer / Stefan Müller-Doohm (Hrsg.) (2011) *Adorno-Handbuch*, J. B. Metzler
- Kocka, Jürgen (2017) *Geschichte des Kapitalismus*, 3., überarbeitete Auflage, C. H. Beck (=2018, 山井敏章訳『資本主義の歴史』人文書院.)
- Larsen, Neil / Mathias Nilges / Josh Robinson / Nicholas Brown (2014) *Marxism and the Critique of Value*, MCM.
- Lukács, Georg (1923) *Geschichte und Klassenbewußtsein*, Malik (=1991, 城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社.)
- Marx, Karl (1983) *Das Kapital*, erster Band, Hamburg 1867, Dietz, *MEGA* Abt. 2. “Das Kapital” und Vorarbeiten; Bd. 5, hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Kommunistischen Partei der Sowjetunion und vom Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands
- _____ (1989) *Das Kapital*, erster Band, Hamburg 1883, Dietz, *MEGA* Abt. 2., Bd. 8
- Müller-Doohm, Stefan (2003) *Adorno*, Suhrkamp (=2007, 柴寄雅子他訳『アドルノ伝』作品社.)
- 内藤季香 (2013) 「アドルノによる『アンブルッフ』再編成計画の解明」, 『美学』 64(1)
- 表 弘一郎 (2013) 『アドルノの社会理論』 白澤社
- _____ (2015) 「戦争のはざまの『社会学』」, 『ARENA』 18
- Redaktion (1929) “Zum Neuen Jahrgang”, *Anbruch* 11(1)
- Streeck, Wolfgang (2013) *Gekaufte Zeit*, Suhrkamp (=2016, 鈴木直訳『時間かせぎの資本主義』みすず書房.)
- _____ (2016) *How will capitalism end?*, Verso. (=2017, 村澤真保呂・信友建志訳『資本主義はどう終わるのか』河出書房新社.)
- Wiesengrund-Adorno, Theodor (1929) “Nachtmusik”, *Anbruch* 11(1)